

「職場からの挑戦」で組織力を高め、労働者の未来を切り拓こう！

総括答弁(要旨)
書記長 加藤 誠

全地本で大会決定スローガンを掲げよう！

JR東労組は、第35回臨時大会で、職場の声を尊重し、全組合員が納得と共感を持てる運動づくりで、新たなJR東労組をつくり上げることを確認し、新生JR東労組をスタートさせました。

そして、第36回定期大会では、現在の執行体制を確立し、第37回臨時大会において、JR東労組の存亡をかけた、向こう2年を展望し、未来を切り拓くために、12地本が総団結し、全組合員と共に組織の信頼回復と強化・拡大を実現することを確認してまいりました。

しかし、職場の仲間の認識は「ごたごたはやめてほしい」「JR東労組が変わったのか分かんない」「いつまで権力争いをしていくのか」となっています。

新生JR東労組の進むべき道を分かりやすくするために「スト権に頼らない、組合員と共に歩むJR東労組をつくらう」と、第38回定期大会スローガン(案)を、第20回臨時中央執行委員会で確認し、追加提起しました。大会承認がされましたら、全12地本の大会スローガンにも掲げることを確認します。

そもそも、このスローガンは、私たちが転換し、実践してきたことをスローガンにただけです。労使共同宣言は失効されたものの、「あくまで平和裡に労使間の話し合いにおいて自主解決を図る」といったスタンスであって、多くの組合員の想いであることを付け加えておきます。

いかなる組織破壊行為も許さない

第35回臨時大会前日、「歴史に例のない組合脱退強要を許さず、健全で安全な職場を目指す連絡会」を結成したと、水戸、東京、八王子地本の情報がホームページにアップされました。組織内組織であることを証明したものが、8月の下旬まで掲載されていました。

さらに、八王子地本の新聞までもが、『民主化闘争情報』にも利用されてしまっています。もはや、そのような行為自体が、新生JR東労組運動の否定と排除であり、組織破壊行為以外の何ものでもありません。その狙いは、18春闘以前に行われていた組織の私利私欲を満たす体制に戻すために行われているとしか考えられません。

職場の仲間と連帯を深めていこう

18春闘の過程で多くの組合員が離脱を余儀なくされ、組織の力量にも多大な影響を及ぼした19春闘は、かつてない厳しい労使議論に直面しました。具体的には、JR東労組結成以来初めて、賃金交渉において、会社回答を受けて席上妥結できなかった

なことです。会社回答を受けたものの持ち帰り、緊急全地本委員長会議を行い、問題意識を一致させ、JR東労組の組織現実をトータル的に踏まえ、満場一致で「妥結」することを確認し、「妥結」してまいりました。

5月18日に「吉川英一」名で元中執14名からの文書が本部に届き、「53ページに及ぶ春闘総括レポート」を作成したと記載されていました。以前に発行された14名を文責とする「53ページに及ぶ春闘総括レポート」には、「格差のないベア」を「3地本が先頭に立ちたか」う体制を固める」と展開されています。このレポートは、2018年11月発行で、第45回定期中央委員会(2019.2.9)以前に19春闘の方針を出していたこととなります。このことから、水戸、東京、八王子地本の春闘方針は、14名の「53ページに及ぶ春闘総括レポート」を基にしたと十分考えられます。

つまり、一部の者たちが謀議を行い、どこからともなく方針を出し、12地本の総団結による19春闘を破壊しようとしたこととなります。このことから、新生JR東労組運動の否定と排除をされながらも、19春闘でもあったと言っても過言ではありません。

機関運営無暗黙。ごまかしは組合員への背信行為

第32回定期大会で「17春闘はスト権を確立してたたかうべき」との発言を受けましたが、当時の柳書記長は「スト権を確立してたたかう」と答弁していません。しかし、東京地本の大会で、当時・鳴海委員長から「東労組の大会でスト権を確立してたたかうことを決定しました」と挨拶がされ、それ以降「17春闘でスト権を確立する」「スト権は確立していかない」と認識が分かれていきました。

その後、吉川委員長(当時)は各地本の委員長を集め、「二つの認識を合わせる。17春闘でスト権を確立する」とは明確に言い切っていない。しかし、議論経過があるので17春闘ではスト権を確立してたたかうと大会決定したこととする」と確認しました。

第32回定期大会の柳書記長の総括答弁5分前に、吉川委員長から「17春闘はスト権を確立して闘うと答弁してくれ」といきなり頼まれたそうです。しかし「17春闘でスト権を確立してたたかうべき」との発言があったが、いくらなんでもすぐには出来ない。でも、できないとは答弁できないから、吉川委員長から柳書記長にうまく話をしてくだささい」というのが三役の中での本当のやり取りだそうです。

このことは、機関で決定していないことを決定したことにする、嘘ごまかし、二枚舌、独善的な組織運営と私利私欲以外の何ものでもありません。それは、組合員に対する背信行為です。

顧問弁護士からの指摘

顧問弁護士からも、水戸、東京、八王子地本に、5月9日付で法律等の解釈につき、明らかに誤解しているところ「ご通知」が出されています。

『批判の自由はありますが、表現の自由や批判を越えるような、誹謗中傷・事実の歪曲を認めることはできません。批判の自由はこれまでも認めてきましたが、大会や定中などで決定したことを守ることが前提です。そして、各級機関役員は決まったことを実践することは義務です。』
それに反する行為は断じて認めるわけにはいきません。

組合員の雇用と利益を守る

新生JR東労組

今の我々を取り巻く状況は、動き方自体が急激に変化してまいります。JR東日本会社が競争社会を生き抜くための危機感を露わにしている中で、労働組合として、どのようにしてたたかっていくかが問われています。

安全や雇用、労働条件といった場合、ゆとりや働きがい、あるいは教育の問題や、労働時間管理の問題にもきちんと踏み込んでいかなければなりません。ですから、何かを盾にして、いくつかの柱を立てて、施策に反対だと押し付けるやり方では、何ら展望は切り拓けません。

会社がジョブローテーションを提案した本音は、運転士、車掌の特権を極力なくすことだと考えています。ですから、情勢認識や会社の本音を踏まえ、労働条件や安全について、職場議論を通じて基本要素をつくりあげ挑んでいこうと考えています。そして、組合員の絆を深め、組織の強化を通じて新生JR東労組運動を強化し、組織と組合員への求心力を高めていきます。

今私たちの最大の課題は、組合員の雇用と利益をいかに守るかです。今後も矢継ぎ早に示される施策に立ち向かっていくためには、「JR東労組」が必要であり、その「組織力」の強化をもとに団体交渉等で要求の実現が出来る組織力を、再構築しなければなりません。

「組織力」を強化する場は職場です。「職場活動を源泉」とし、様々な運動をつくり出し、抵抗とヒューマンズムの精神を育んできたことは、これまでの歴史の最大の教訓です。

労働者の未来を切り拓くために、私利私欲に奔走する者とは断固としてたたかい、「スト権に頼らない、組合員と共に歩むJR東労組をつくらう!」のスローガンのもと、今一度、「職場からの挑戦」を、一人ひとりが実践していくことを要請します。

世界の仲間と連帯を深めていこう!



5月20日～24日、ハンガリー自由鉄道労組から「30周年記念大会」への招待を受け、山口委員長を代表派遣しました。

ハンガリー自由鉄道労組とは、初代松崎委員長がハンガリーの労働者のたたかいに連帯し、支援カンパを贈ったことから交流が始まりました。以来、2009年第5回大会と2013年第6回大会、今回で3度目の招待となりました。2017年には、JR東労組結成30周年記念第34回定期大会に、委員長のゾルダン・ハラシ氏にご参加いただきご祝辞をいただきました。

さらに昨年の西日本豪雨、北海道地震、さかのぼれば2011年の東日本大震災でも多額のカンパをいただいています。

大会では、ゾルダン委員長が選挙で再選を果たし、労働力不足が深刻さを増す中で、様々な効率化施策とのたたかいの報告を受け、JR東労組が抱える組織拡大の課題についても、様々なアドバイスをいただきました。また、共に記念大会に参加したドイツやクロアチアの労働組合からは、安全問題など今後も継続して議論していきたいと意見をいただいています。

JR東労組運動をさらに強化していくための情報交換など、海外の仲間たちとも連帯を深めていきます。

2018年度ユニオンスクール

ヤングリーダーコース修了式



2年間共に学んだ仲間と共に

組織強化・拡大に向けて奮闘していきます!

5月17日、本部大会議室において修了式が行われました。Y2-1とY2-2の各クラス代表が決意表明をしました。2年間の受講期間中に18春闘のたたかいがありました。悔しさや悲しさ、苦勞や悩みを本音で議論して共に乗り越えてきた仲間の大切さや、2年間共に議論し、指摘し合ってきたからこそ今の自分がある、これからも仲間を大切にして奮闘していくことが語られました。

そして、それぞれが新生JR東労組運動を職場から担っていくことが確認されました。



昨年夏に捕まえたカブトムシの子どもが今さなぎになってる。親のカブトムシは卵を産んですぐに死んでしまう▼子どもと一緒に捕まえに行き、自宅で飼育しているが、カブトムシの生命の短さと次なる生命の誕生に感慨深いものを感じる▼家で飼育するためには、さまざま準備が必要だ。自然の中で生きている昆虫を人の手で飼育するのだから当然で、大切に世話をしなくてはいけない。私が子どもの頃は捕まえて嬉しかったという感情だけだったが、大人になってカブトムシの成長を見ていると

連う感情が芽生えてくる▼カブトムシは卵から次の卵を産むまで約一年の歳月を要するが、無事に成虫にまで育つのは全部の卵ではない。卵からは幼虫にならないもの、幼虫の最中に死んでしまうものなどが様々である。日々の世話を怠ると育つはずのカブトムシが人の手によって育たなくなってしまう▼人間社会も同様で、人の成長を日々見ているが世話や関わりが重要なことである。日常を当たり前のよう過ぎていくと気が付かないこともあるが、ちょっとした変化に目を止めて話してみることも重要な▼自然から学び、人間としての生活を捉え返すことも大切である。

(K・S)